

小悪魔の
パチュリィ
観察記

ADULT ONLY



110-GROOVE

吾輩は小悪魔である。
名前はまだない。

なんでも
紅く薄暗い館に
住んでいる事だけは
はつきりしている。

吾輩はここで初めて
魔女というものを見た。

しかも後で聞くと
それは「バチユリー」という
館中でいちばん不動な
人物であったそうだ。

このバチユリーというのは
時々近場の本を手にとって
読みふけるといいう話である。



とまあ、
某書をパロって
みたもの…

続けるだけの文才は
持ち合わせていないので
後は適当に記していく。

この本は
量が多すぎて
全て把握は
出来てはいないが

ズラァ…

今まで本整理を
手伝ってきた感では
ここにはガチのエロ本が
存在しない様に思える…

パチュリー様は
エロい事には興味が
無いのだろうか？

エロは世界を巣食う、と
信じている私には
にわかに信じがたい。

むしろ信じたくない。
エロいパチュリー様が
私は是非見たい。

パチュリー
様へ
オススメの
一冊です！

ここはひとつ、
私の秘蔵のエロ本を置いて
パチュリー様の反応を
観察してみたいと思う。



早速興味を示す
パチュリー様…



パチュリー様は
本を読むのが
とても早い。

いつも思うのが
あれでちゃんと
頭に入っているのか
不思議な程の速度だ。



そして、エロ本だと
気が付いた様子の
パチュリー様。



慌てて周りを
見渡している。
かわいい。

私は居ません。



結局、再度
読み始める
パチュリー様。

途中で読むの
やめると続きが
気になりますもんね。

よく見ると顔が赤い。
進んだページ数から
察するに、濡れ場に
突入したのであろう。

パチュリー様の
この様な初々しい反応は
私も初めて見るので
少し興奮してきた。



どうやら
読み終えたようだ。



と思ったら
少し遡っている。

お気に召したシーンが
あったようだ。
オススメ大成功である。



この様子を見るに
パチュリー様にも人並みに
性的好奇心はあるようで
私は安心した。



…おや？

パチュリー様の
様子が…

ふー…



まさかの
急展開……!

する
する……

あの本を読んだ事で
我慢が出来なく
なったのでしょうか？

ちゅんちゅん

もう既に
汁気たっぷりの
いやらしい音が……

うわ……すご……これ、
見てるのバレたら
私殺されるかな……

ちゅんちゅん
ちゅんちゅん

……

……はっ!
思わず見入って
しまいました……

……パチュリー様の
素晴らしい一面を
見ることが出来ました。

ちゅんちゅん

ちゅんちゅん

ちゅんちゅん

ちゅんちゅん

ちゅんちゅん

—で、これは
どういう事かしら？



バレました。



冷静に考えれば、
この本をオススメした理由を
真っ先に問い詰められるのは
火を見るよりも明らかで。



私も私で、見たものが
あまりにも衝撃的すぎた為、
興奮冷めやらぬままに
レポート作成を始めてしまい



完成と同時に奪われ
全てバレて現在に至る、
という状況である。



エロ本を図書館へ
持ち込んだ事よりも
痴態を観察された
事の方がご立腹の様子。

当然である。



パチュリー様に
恥ずかしい思いを
させた事を詫びるべく

しかしこの状況は
大変よろしくない。
小悪魔大反省。



えっ…？ え？
これ…おちん…？
なんてついてるの!?

私は普段、
パチュリー様を想って
オナニーする時は
いつもこの様な形で
する事を説明した。



私のオナニーも
パチュリー様に見せる
という「お相子」で
手を打ってもらう事に。

んなっ…?!

パチュリー様の
目の前で一物を
しごいてみせる。

普段なら隠れて
する行為なので
妙な開放感がある。

そ…そんなに
強くゴシゴシして…
い、痛くないの…?

どうやらパチュリー様は
男性器でのオナニーを
見るのは初めてのようだ。

お近くでどうぞ、と
近づけてみると

恥ずかしそうに
目を逸らした。

が、また
すぐに視線を
向けたりする。

こんな初々しい
反応をされると、
私のオナチンも更に
元気になってしまう。

最終的には
目を離さない程
気に入って頂けた
様だった。

あのパチュリー様が
私の股間の前に跪き、
頬を赤らめつつじつくりと
一物を観察している姿は

私の中の
理性のタガを
着実に外しに
かかってきており

気が付くと、
事もあるうに

目の前の
パチュリー様の肩へ
両足を絡ませ、

自分の怒張した一物を
その柔らかなほっぺへと
押し付けていた。



またしても
不味い事をした。
そう思った。

ふと我に返り、
流石に今度こそ
死を覚悟したが

バチ...



バチユリー様は
バチユリー様で、

この私の暴挙に対して
怒りよりも性的好奇心が
勝る結果となったようだ。

あ...あたたかくて...
すごく脈打ってる...



すると、
バチユリー様は
落ち着いた様子で

私の両足を
自分の肩から
そっと降ろすと



じつくりと
握ってきたり



引っ張って
みたり



堪能して
おられる様子。

におって
みたり...

そして
ついには

味もみておこう
と言わんばかりに

たどたどしく
フェラチオまで
始めたのだ!

ねえおふ



確かに、この流れなら
お口でもして欲しいな
とか多少は期待しては
いたもの……!

まさか本当に!
パチュリー様が
お口で!私を!

紅魔館の頭脳であり、
その随一の知識を
発する為の

生来の強大な魔力を
圧倒的な魔法へと出力
詠唱する為の

パチュリー・ノーレッジを
パチュリー・ノーレッジ
たらしめる、まさに至宝
とも言えるその口を



私の一物を
味わう為に!

私を性的に気持よく
するため「だけ」に
使っている!

ん…む…

どうかしら:
初めてだけど
気持よくてきてる
ものかしら…?





こんなの…
もう…

我慢出来る
わけがないじゃ
ないですか…!

…っ!?

ぶ…
ぶ…
ぶ…



濡れちゃうかと
思ったわ…

と言いながら
まさかの
笑顔であった。

こぼした精液を両手に
受け止めたその姿は、まるで
自分の口で射精させた事を
誇っているかの様にも見えた。

げほっ…!

きゅ…急に…
乱暴にするなんて…
ひどいわ…

テンションが
上がりきってしまい、
またしても粗相を
してしまった…

だが、それに対して
バチユリー様の反応は

げほっ
げほっ
げほっ

それにしても：
精液って思ったより
たくさん出るもの
なのね…

私のせいで
パチユリー様が
間違った知識を
得るのは困るので

それは私の性力スキルのお陰でなので普通の人はそんなに生まれません、と素で説明してしまつた。

どうなのよ

おもむろに
すすりだした。

全部じゃ
ないなら…

次からお茶を所望されたら精液を出してあげたい欲求に駆られるほど清々しいまでのエロ本知識である。

飲んで頂けるのは嬉しい事であるが、別に美味しくも無いので、心の準備が必要なくらいなら飲まないほうが良い、と伝えると

どうやら、出された精液は飲むのが礼儀だと思っていた様で、それで先ほど量を気にしていたらしい。

すすりだした。

でも：
あのオススメ本だと
飲んでたじゃない？

あのシーンだと
美味しそうに
書いてあったから

思わず、味を想像しながら
読み返しちゃって…
それで記憶に残ってたの

と言われ、確かに
あの本にも飲ませてた
シーンがあった事を
思い出した。

あの時遡って
読んでいた
シーンが判明。

パチュリー様は
時折このように

気に入った本の情報を
鵜呑みにする、といった
ボンコツな所がある。

他にも気になった
シーンがいくつか
あったから試して
みたかったけど…

それらも
フィクションなら
別に試さなくても
いいかな…

申し訳ないとは
思ったが、それはそれ
これはこれ、である。

そうか…
普通は
飲まないのね…

誰かに言う
前に知れて
良かったわ…

エロ本に感化されると
今回の様な事になるのは
自覚しておられたようで

実は未然に防ぐ為に
近くにエロ本は
置かないようにしていた、
という事を後に聞いた。

なんだか今回は
申し訳ない事をした。

勿体無いので今回は
「正しい事もあるので、
徒勞を恐れず
試すべきです！
私がついてます！」
と力強く説得した。

もちろん、この場合の
「私が付いている」とは
ちんこの意味である。



パチュリー様
裸



パチュリー様



パチュリー様は私より背は低いが胸の存在感がすごい。私より大きい。

気になってたのはおっぱいに関するシーンらしい。



俗にいう
トランジスタ・グラマー
とかいうやつである。

余談が続くが、以前ちよつと羨ましいのでどうやってナイスボディになったのか質問したら

『腹筋は喘息のせいだし、胸は、本整理？がなんか運動になってるみたいで：お尻は単に座りっぱなしで大きくなっただけだと思う…』

という、「奇跡かよ」みたいな回答が返って来て参考にならなかった。

ぼるんっ



はじめてお会いした時、ゆつたりとした服のせいで妊婦さんかな？と、失礼な勘違いをした事がある。

はじめて着替えを覗いた時、それはもう度肝を抜かれた。

もちろんそのあと怒られた。

本人としても大きさは
自信があるそうだが、
乳首がひきこもりで
ちよつとだけ
恥ずかしいという。

「らしい」感じがして
私は好きです、と言うと
少し複雑な顔で照れた。

——本題に戻る。
「バイスリ」描写で
気になる事があるらしい。

「アレって、
挟む側も
気持ちいいの？」
との事。

正直、おっぱいの掴み方
次第では…と思ったが、
そう答えてしまったら
話が終わってしまう。

ここは、モノを試して
お互いのモノを使って
検証しましょう、と促した。



最初はパチュリー様に
自分の思うバイズリ
というものを披露して
いただいた。

時折、「どうかかな？
気持よくできてる？」
といった具合の目配せを
してくるのが心底かわいい。

だが今回は、
「挟む側が気持良いか？」
が焦点なので、ここは一つ
胸に刺激が伝わる方法を
提案してみた。

腕で固定してもらい、
こちらが馬乗りで
腰を打ち付ける形だ。

正直なところ、
私がパチュリー様の胸で
やってみたいブレイの
一つを叶えただけである。



バイズリが成功して
嬉しいのか、谷間に出た
精液を見せつけてくる。
実際何もしていないのに
このドヤ顔である。



念願が叶い
たまらず射精。



それと…貴方が
ガンガン腰振るから
腕にこすれて乳首が
出てきちゃった…♡



なるほど…

これは刺激云々よりも
なんだか受け止めてあげた
満足感で気持ち良いかも？

とりあえず
なんとなく
理解はしたらしい。

この報告は
どことなく
嬉しそうである。

あと
気になる
事は…

殆どの本で
気持ち良いと
書いてある
『生挿入』とか…

指とかも生だけで
どう違うの？

ま

そういう事でしたら
生ちんぼ挿入体験
実践しましょう！

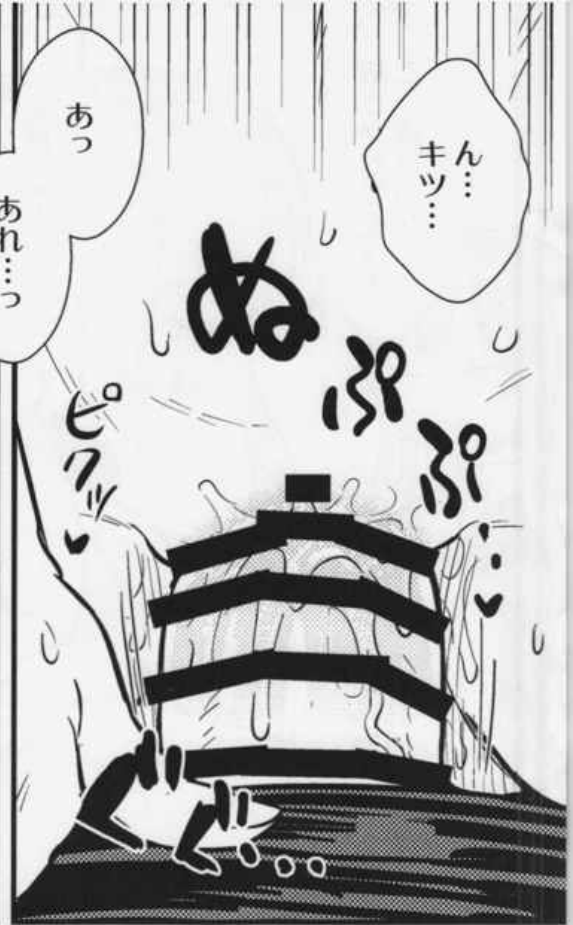
ぽんぽんぽんぽん
トロっ

それにしても…
小悪魔とは名ばかりで
あちこち大きすぎるわ…

こんなの…
どこまで
届いちゃうの？

自分のペースで
入れていいわよね…？
じっとしててね…

もい
もい



くっ♡
やっぱり
おっきい♡

んあっ♡

大きすぎなのよ...
もう一回...!

パチユリー様の膣内なが
狭すぎるんです...!!
これが一発目だったら
きつと瞬殺だった...!

膣内^{なか}が狭く、何度もちんぽを
追い出してしまいが
めげずに繰り返し挑戦する
パチュリー様。

十数往復ほど
したあたりで
回転数が上がる。

もう既に検証云々は
頭がないようで、
完全にメスの顔で腰を
振り続けていらっしやる。

私の腰の上で
マジイキする
パチュリー様。

最高に
かわいいです。



あのパチュリー様が私のちんぽに負けて完全にイキ顔を晒している…♡



すごいエロい顔…♡きつと親友のレミリア様になんて見せたことがない顔ですよ♡

ぎゅっ♡

でも、お休みのところすみませんパチュリー様。私まだイけてないんです♡



ま…ま…あっ♡



!?



という感じで、
前回のレポートを
取り上げられた後に

パチュリー様の
痴態を再度
拝むことが出来た。

レポートは書かない
と言ってしまったので
これは見つからない様に
気をつけなければ

——ここで
レポートは
終わっている。

☆

サークル『本の虫』に
小鈴が新たに参入し
改め『本の蟲』となり、
次回作会議中――

うちの小悪魔の様子が
なんかおかしいと思ったら
そんなのまとめてたのよ！

ヒドイと
思わない？

ヒドイとは思うけど…
小鈴にいきなり
こんな赤裸々な事情
見せていいの？

あ…



奥付

発行日:2015年08月14日
発行 :110-GROOVE
著者 :イトウゆうじ
原作 :上海アリス幻楽団 東方Project

URL:<http://www.r20.7-dj.com/~ug110/>
twitter:ug_110 pixiv:14192

印刷 : みかんの樹 様

この本は東方プロジェクトの二次創作です。
18歳未満の方の購入、閲覧は禁止です。
無断転載、アップロードなども禁止です。